

一〇月二三日（月）

右手を見ればJRの高架が見え、左手の方を見れば向こうの方に阪急電車のすれ違いが見える。目の前には、右の方から左の方へ流れていく川がある。土日や夕方なら、すぐその高架下やランニングコースを走る人がもつといるのだろうけど、月曜日の午前中は流石にといった様子。

私はここまで歩いてきた足を休め、呼吸を整えながら、目の前の流れを延々と眺めている。対岸の河川敷を駆け抜けていく人、のんびりウォーキングしている人を時々観察しながら、その人の人となりや生活を勝手に想像してみたりする。

こうして、ただポーツとしながら、たまに人間観察していると何かが閃くかもしれない。アイディアの端緒、描きたいシーンのぼんやりとしたイメージ、妄想するきっかけが少しでも掴めれば十分なんだけど、すぐにポンポンと出てこないから、こんなところで川や河川敷を観察しているのだろう。

左手、下流の方を眺めていると、黒いジャージに身を包んだ男性が、こちらに向かって歩いてきている。豊かなグレイヘアと歩き方に、なんとなく見覚えがあるような気がすると思つて見ていると、向こうも私の視線に気がついたらしく、こちらを向いた。

「ああ、どうも」
顔がはつきり分かれるところまでくると、相手の男性は手を上げて挨拶してくれた。

「先日はお土産、ありがとうございました」

「いえいえ、いつもお世話になっておりますから」

相手の男性、武藤さんはウォーキングを中断して、立ち止まってくれた。彼は、私の周りを見ながら、「今日は、お一人ですか？」と訊いた。

「旦那に任せて来ちゃいました」

「武藤さんは小さく声を漏らしながら、小刻みに頷いた。」

「武藤さんは？」

「健康のために少し歩こうかと」

彼は対岸の方を指差しながら、下流の方へ空中で弧を描きながら説明してくれ

た。お家がある上流の方からではなく、下流の方から歩いて来たのは、すでにラ
ンニングコースのゴール地点まで行って来たかららしい。

微妙に蛇行する川に沿って、玉島小学校の裏辺りまで行くと、それなりの距離
がある。

「あそこまで行って戻って来たんですか？」

「いやいや、運動としては全然足りなくらいですよ」

武藤さんはサラッと言った。

「本当は走った方がいいんですけど、この年で急に走るのもね」

彼の懸念に思わず「そうですね」と同意の言葉が漏れた。武藤さんは何かを思
い出したようにスマホを取り出し、「ああ、でも今度ね」と画面を操作して私に
見せた。

「ノルディックウォーク教室があるとかで、これに妻と参加しようかと」

次の土日に、近隣の有志が主宰でノルディックウォーキングの講習会をやるら
しい。参加する前に自分で調べて、杖はすでに買ってあるのだとか。

「まだ杖があるみたいなんで、森田さんはどうです？」

私が武藤さんにスマホを返すと、彼はそれを仕舞いながら言った。

「気分転換にもなるし、頭にもいい刺激になるらしいですよ」

健康に大きな不安があるとは言わないものの、体力維持に何かしたい気持ちは
ある。杖をつきながらの全身運動は、頭も確かに動いてくれるかもしれない。

私が「旦那と相談してみます」と言うと、武藤さんは「そうですね。ではで
は」とウォーキングを再開して上流の方へちよつぱり早足で歩いていく。

ウォーキングか。ここでボーツとしているよりは、良いかもしれない。ちよつ
と行ったところにあるパン屋さんにでも寄って、お昼ご飯を買って帰ろう。

随分と先に行ってしまった武藤さんの背中を、無理のない速さで追いかける。

ちよつぱり肌寒い空気がちょうど良い。閃きよ、来るなら今だ。

初出 令和三年一〇月二七日 アルファポリスにて公開